

# 奄美群島の高校全9校が集結し、探究学習の成果を発表

## 「高校生サミットIN 奄美 2025」リポート

鹿児島の南方の海上、南北約200kmの間にある8つの有人島から成る奄美群島。その中に9校の高校が点在し、約2,000人の生徒が学んでいる。地理的条件が厳しい中で探究学習に取り組む生徒を支援しようと、2024年3月に結成されたのが「奄美群島高校探究コンソーシアム」だ。25年3月には島内外から生徒が集まり、同コンソーシアム主催の探究学習の発表会と生徒の交流会が行われた。その様子をリポートする。



写真上／サミットでの発表の様子。

写真左／生徒の交流会の様子。

### 離島の探究学習を支援するため、コンソーシアムを結成

探究学習の支援を大学に依頼したいが島内に大学がない、探究学習の成果を校外でも発表したいが費用面で島外の大会に参加することは難しい……。そうした地理的条件から生じる課題がある中で探究学習に取り組む生徒を支援するため、2024年3月、鹿児島県の奄美群島の高校9校と、鹿児島大学などの大学等によって、「奄美群島高校探究コンソーシアム」が結成された。

豊かな自然や独自の文化を持つ奄美群島には多くの研究者が訪れる。そこで、こうした研究者が所属する大学・研究機関にコンソーシアムへの参画を依頼。探究学習の支援が可能な研究者の情報を一覧にして、群島内の高校で共有し、各校が参画機関や研究者に直接依頼できるようにした（図1）。コンソーシアムの発起人の1人である鹿児島県立大島高校（以下、大島高校）の貴島邦伸前校長（現・鹿児島県立楠集中学校・高校校長）は、こう説明する。

「研究者が来島した際に生徒に助言・指導してもらう仕組みにすれば、研究者に大きな負担をかけることなく、生徒の探究学習を支援してもらえるのではないかと考えました」

24年度には4校がその仕組みを利用。25年度は、サンゴの生態調査や奄美の方言などのテーマで大学教員に支援を依頼している。「コンソーシアム事務局を担う大島高校の中渡瀬将之先生は、「登録研究者の一覧に『支援可能な内容』が記載されているため、誰に何を依頼できるかがひと目で分かり、大学や研究者にスムーズに依頼できました」と語る。

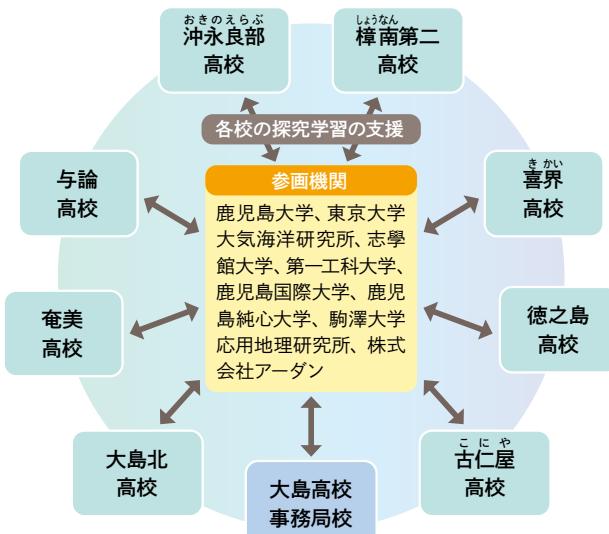
### 他校生も集まるサミットでの発表が、生徒の目標に

25年3月には、大島高校を会場に、同コンソーシアム主催の「高校生サミット～奄美2025～」が行われた。生徒が大勢の人の前で探究学習の成果を発表し、同世代と交流する場として同サミットを企画した。同サミットの開催は今回が2回目で、コンソーシアム参画校全9校と、中渡瀬先生が以前勤務していた神奈川県・横浜市立横浜サインエンスフロンティア高校が参加。大島高校の1・2年生全員やコンソーシアム参画大学の教員、サミットを支援する地元企業の来賓を前に、各校の代表チーム計28人の生徒が発表した（図2）。

「探究テーマは伝統文化や自然、地域の社会課題など、多岐にわたつてい

ました。代表チームの選考は各校に一

図1 「奄美群島高校探究コンソーシアム」関係図



■ コンソーシアムの登録研究者一覧

No.	氏名	所属	専門分野	高校生に提供できるテーマ及び講座等	連絡先 (Email)	その他 (奄美群島への来訪予定、旅費・報償費等)
1						
2						

探究学習の支援が可能な研究者の情報（氏名、所属、専門分野、支援可能な内容、連絡先、来島の時期等）を一覧化し、参画高校で共有している。

同コンソーシアムの詳細は、下記サイトを参照。

<https://sites.google.com/kago.ed.jp/iamamiconsortium/>



写真1 大学教員の質問に堂々と回答する生徒たち。サミットの様子はライブ配信され、参加校の生徒も視聴可能にした。アーカイブは下記動画サイトで公開中。

<https://www.youtube.com/@koukouoshima9827>

「今後は各校の探究テーマを共有し、同一のテーマがあれば共同研究を行うことなどを検討中です。高校と大学、地域が連携し、一体となつて地域の人材を育てていきます」（中渡瀬先生）

図2 「高校生サミットIN奄美 2025」概要

日程 2025年3月19日（水）

会場 鹿児島県立大島高校

プログラム

- 開会宣言／歓迎アトラクション・奄美民謡
  - 基調講演
  - 課題研究発表（発表10分間、質疑応答5分間）
- 参加校と発表タイトル（発表順）
- 鹿児島県立大島高校「奄美の人々の暮らしに発酵食品を」
  - 鹿児島県・私立樟南第二高校「エコツーリズム～実践を通して学んだこと～」
  - 鹿児島県立徳之島高校「徳之島の犬や猫を『家族』という意識に」
  - 鹿児島県立与論高校「与論島の教員住宅老朽化に関する調査」
  - 鹿児島県立喜界高校『『がじやみスナイパー』～喜界島の特産を活かした商品開発～』
  - 神奈川県・横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校「ジエンガの抜けやすさの違い」
  - 鹿児島県立奄美高校「黒糖焼酎の文化を未来へつなごう」
  - 鹿児島県立大島北高校「未来へ残そうシマの宝～奄美大島の固有種を守るために～」
  - 鹿児島県立沖永良部高校「2050年の沖永良部島を考えよう～『SIMおきのえらぶ2050』にチャレンジ～」
  - 鹿児島県立古仁屋高校「久慈白糖工場跡出土煉瓦の製作地について」

4 アトラクション：書道パフォーマンス

5 全体総評

6 生徒交流会

※図1・2ともに、「奄美群島高校探究コンソーシアム」提供資料を基に編集部で作成。

任していますが、各校の話によると、本サミットでの発表が生徒の1つの目標になつてゐるそうです」（貴島前校長）各チームの発表後には、大学教員5人による質疑応答と指導・助言が行われた（写真1）。教員住宅の老朽化を調査した鹿児島県立与論高校のチームには、「よい着眼点だと思う。生徒にとにかく、社会課題としても重要な」と評価しつつ、「参考文献が新聞記事だけだった。研究論文を調べて掘り下げる」とさらに「よくなると思う」などと助言した。また、黒糖焼酎について探究した鹿児島県立奄美高校のチームは、休憩時間に大学教員に探究学習の方向性について相談。大学教員は、「酒にはそれにもまつわる独自の文化がある。飲

酒のできない高校生だからこそ、文化になつてゐるそうです」（貴島前校長）

発表を聞いた会場の大島高校の1・2年生にも、多くの気づきがあつた。「テーマ設定が重要だと感じた。しっかりと軸がないと、探究がいろいろな方向にぶれてしまつ」「どのチームも粘り強く取り組んでいた。その姿勢を自分も持ちたい」など、様々な声が聞かれた。

最後に、生徒の企画・運営による交流会が実施された。「あなたが帰つてきたくなる故郷とは？」など、3つの話題で10校の生徒が意見を交わした。企画・運営を担当した生徒は、「奄美のことを考えて行動している高校生がこんなにいる。力を合わせて奄美の未来をつくつていきたい」と力強く述べた。一連の取り組みは、離島という環境で大学教員との対面交流の仕組みを構築したことなどが評価され、独立行政法人教職員支援機構の第8回NITS大賞を受賞した。25年度からは、奄美群島全12市町村が参画する「奄美群島広域事務組合」など、地域の支援を受けて、活動を継続している。

酒のできない高校生だからこそ、文化